

記録
35ミリ
カラー／24分

- 企画
大成建設株式会社
- 協力
指揮： 朝比奈 隆
ヴァイオリン：
阿部富士男
演奏：大阪フィル
ハーモニー交響楽団
写真： 木之下 晃

スタッフ

- 製作
村山英世
- 脚本・演出
土屋信篤
- 撮影
野崎嘉彦
上甲 巖
- 録音
菊地進平
- 音楽
東京BGM
- 解説
伊藤惣一

1983年教育映画祭優秀作品賞 第21回日本産業映画コンクール日本
産業映画賞 第25回科学技術映画祭科学技術庁長官賞

日本には響きの良いホールが少ないといわれてきた。響きは、それが演奏される建築空間と大きな関係を持っている。ヨーロッパの名ホールはいずれも長い歴史と文化の生み出したものといわれる。映画は、響きを音響学的に解説するとともに、日本ではじめてクラシック専用の理想的音楽空間として建設された大阪のザ・シンフォニー・ホールを紹介しながら、音と建築の関係を追究していく。



多くの音楽家たちは、ホールもひとつの楽器であるといっている。良い音のするホールでこそ作曲者、演奏者の意図を正しく聴衆に伝えることができる。ザ・シンフォニー・ホールの建設にあたり、よりすぐれたクラシック専用ホールをめざして様々な研究や実験が繰り返された。まず残響とはどのようなものかを調べた。無響室（音を少しも反射しない部屋）と残響室（よく音を反射する部屋）とでヴァイオリンを弾き比べ、また水の波紋や、レーザー光線を使って音の広がりや反射の仕方などを視覚的に調べたみた。

響きとクラシック音楽との関係を歴史的に見直してみると、中世の教会音楽は、長い残響時間を生かすように作られ、一方、宮廷音楽は、比較的短い残響時間であることがわかった。ロマン派時代を迎え、より豊かな音を求めるオーケストラのための専用ホールが作られるようになって、新しい音楽が、ホールの建築に影響を与え、そのホールが作曲や演奏に影響を与えていったのである。次第にホールは、音楽のためのひとつの立体空間としてとらえられるようになっていった。

こうして様々な調査や実験をもとに、ヨーロッパの名ホールの伝統と最新の音響技術を取り入れた〈ザ・シンフォニー・ホール〉が完成した。